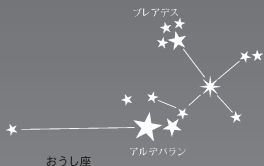


# ポラリスを仰ぐ北の大地から



## 「10月31日」

石狩医師会 会長 立石 圭太

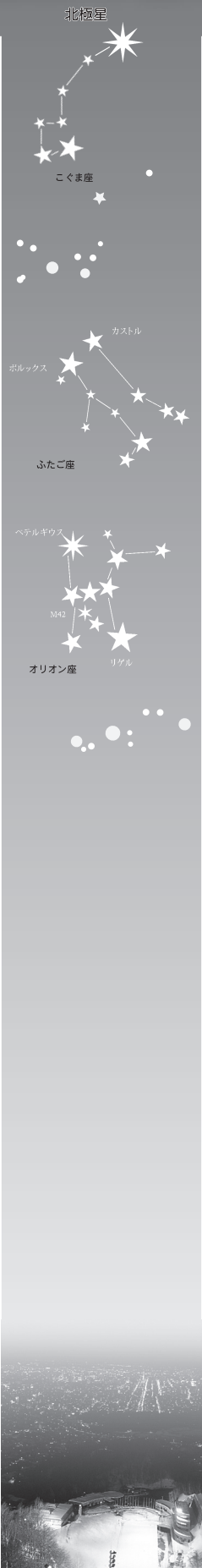
10月31日、札幌市医師会から札幌通信が届いた。表紙の写真は今年の皐月賞馬アルインで一際目をひいた。競馬というと石狩医師会には、競馬が大好きな古河知行先生がいる。古河先生は、開業した年や年齢も近いだけでなく、とても親しみやすい先生で、よく一緒に出掛けたりする。中でも毎年函館競馬ツアーは恒例の行事となった。古河先生の影響を受け、自分もよく市内の場外馬券売場で勝馬投票券を買うようになり、馬を応援するようになった。

古河先生が病気をされてからのここ2年は、函館まで遠いこともあり、多少近い門別競馬場へ出かけている。門別競馬場のパドックは、馬までの距離が非常に近く、古河先生は慎重に馬を観察する。ゲートインをする時には、双眼鏡を持って見守り、スタートするとゴールまで自分の馬を真剣に応援する。古河先生の診療がいつも真剣だったに違いないと感じる一面である。古河先生が体調を悪くし休診された時、地域住民がざわついたのも頷ける。

古河先生のクリニックは、石狩市内の南部で札幌市手稲区に近かったが、以前は、合併した厚田区にある保育園にも嘱託医として、健診に出かけていた。「遠くて大変だね」と言うと、「健診が終わった後、子どもたちが並んでお礼をいうのを聞くとやめるわけにはいかないんだよね」と話していた。何年も続けられていたので、昨年、地域の表彰の話もあったが、うまく逃げられてしまった。

札幌通信が届いた10月31日、古河先生は家族に見守られて旅立ってしまった。競馬の好きな先生であったが、厚田地区の保育園の話を知ると、それは「勝ち負け」というより、「応援する」ということが好きだった先生だと思う。古河先生とは、一緒に飲みに行き、地域の医療について話をして楽しく話を聞いてくれる。いつも応援されていたのかもしれない。

10月31日は「ハロウィン」。秋の収穫を祝い、お盆と同じく亡くなった人に感謝を伝える日でもある。20年来の親友、古河知行先生に、感謝の意を捧げたい。



## 北方四島の医療事情 (調査団から伝え聞いたこと)

根室市外三郡医師会 会長 杉木 博幸

北方四島における日露共同経済活動に関する官民現地調査団が、平成29年6月下旬に国後島・択捉島・色丹島を訪問した。調査団の一員から四島の医療事情につき話を聞くことができた。

まず国後島の人口は約8千人、択捉島は6千人、色丹島は3千人である。平均給与は、ロシア全土が34,000ルーブル（1ルーブルは約2円）であるのに対し、サハリン州は61,000ルーブルと大きく上回っている。クリル開発計画によりさまざまな施設が建設された。また人口増対策として子供が3人産まれたら200万ルーブルが支給され、また4人目が生まれると車が貰えるという。島内には老人が少ない。それは一定期間島に定住すると年金が2.8倍支給される資格が得られ、その後本土へ戻る人が多いからだという。

医療については、国後島、択捉島、色丹島にそれぞれ病院があり、四島内には約65名の医師が従事し、ベッド数は約150床という。根室圏域の人口10万人あたり医師数は96.8人（全道平均は229人）となっているが、北方4島は382人となり、根室の4倍という驚くべき数字である。一次医療レベルは全て対応可能とのことで、手術件数も多いという。二次医療は船で5～10時間かかるサハリンが、三次医療はモスクワが担っている。僻地へ医師を招聘するため、最低5年勤務する条件で一時金として150～300万ルーブルが医師に支給される。住宅も支給され、数年後には個人所有となるという。かなりの待遇である。日露共同経済活動に「医療」も組み込まれているが、ロシア側は「医療は充実しており、日常診療に支障ない」との立場で、遠隔医療についてもさまざまなシステムの違いから困難との意向だそうだ。共同経済活動で早期に実現を目指すことで日露が合意した5項目の事業に今のところ「医療」は入っていない。